

「春眠」について

富 永 一 登

はじめに

開元十六年（七二八）の科挙に落第し郷里の襄陽に帰っていた孟浩然は、開元十八年（七三〇）の春、蘇州に滞在する。四十二歳のことである。

この蘇州での出来事について、莊魯迅氏は『物語・唐の反骨三詩人』（集英社新書、二〇〇二年）の中で、次のような話を記す。

蘇州に着いた孟浩然是、旧知の馬四公の世話になつていた。雨の降り続くある晩、馬四公は孟浩然を「紅塵楼」という妓楼に連れだし、小真娘という妓女に引き合わせる。小真娘は、自ら曲をつけた「微雲、河漢を淡くし、疏雨、梧桐に滴る」という孟浩然の詩句を歌う。彼女は馬四公に、この詩の作者が生きていれば、その人に身を捧げてもいいと言っていた。孟浩然是小真娘と枕を共にし、「春暁」の詩を遺して、友人と恋人に別れを告げて、また放浪の旅に出る。（要約）

「春暁」の詩とは、

春眠不覺曉	春眠	曉を覺えず
處處聞啼鳥	处处	啼鳥を聞く
夜來風雨聲	夜來	風雨の聲
花落知多少	花落	つること知る多少

という人口に膾炙した有名な作品である。その詩に関して、このような場面を設定したことについて、莊魯迅氏は、

「春暁」は、これまで千年以上も、季節の移ろいをうたった傑作と見なされてきた。確かに、作品を文字通りそのまま理解すれば、いかにもその通りである。だが、「春暁」を、同じく春を詠んだ他の詩と比較し、何度も読み返しているうちに、思いがけずその違いに気がついた。その違いというのは、「春暁」を詠んだとき、孟浩然是春の景色をまったく見でないことである。…（中略）…では、孟浩然

はいったい、どうして春を見ないで春をうたつたのか。風雨が入り交じったその夜、彼は春よりも美しく、儂いものを見ていたのではないだろうか。「暁を覚えず」にいるのは、浩然が初めて枕をかわした小真娘と、もつと春の夢に身をゆだねたいと思ったからに違いない。わたくしは、小真娘と孟浩然の恋物語に想像をいつそう膨らませた。

と述べる。そして、詩の内容と重ね合わせて、

絶え間ない鳥の鳴き声に浩然は目を覚ました。暁がすでにおとずれたのだろう。かたわらの小真娘は唇を半ば開いてまだ熟睡している。もう少し、この甘くて切ない時を留めておきたいと、浩然は心に願ったに違いない。

昨夜からの風と雨の音は、詩人に春が今、過ぎゆくとして、いることを告げたのだ。春が過ぎてても来年まためぐり来るが、自分の心に芽生えた恋は、ひとたび去れば二度と戻ってこないのだ。…（中略）

浩然は、やがておとずれる別れを惜しんで、舞い落ちる花の凄艶な姿を想像する。枕元へ流れる小真娘の黒くてゆたかな髪は、散りかさなる花びらのようにみえてきた。彼は身を起こし、過ぎゆく春、過ぎゆく恋への限りないとおしみを、「春暁」に

こめた……

わたくしが、千数百年来の「春暁」に対する解釈へ異議を唱える理由はここににある。「春暁」は、単なる季節の歌ではない。その行間には、詩人孟浩然の、過ぎゆく恋の季節を惜しむ情感がこめられていると思うからだ。

と、ただ惜春の情を詠ったというものでもなく、宮仕えのための早起きの必要がない隠者の気ままな生活ぶりを詠ったというものでもない、全く新しい解釈を提示している。²⁾

莊魯迅氏の「春暁」詩の舞台設定は、あくまで自身の想像によるものであるが、詩の解釈には、それなりの説得力がある。というのも、長年、「春眠」という詩語に割り切れぬ思いを懷いていたからである。なぜ、春の眠りなのか。ぽかぽか陽気の春の朝は心地よい寢床からなかなか離れられないからだという説明は、この孟浩然の「春暁」の解釈から始まったのではないのかとも思われる。莊氏は、「孟浩然が春の景色をまったく見ていない」ということから、想像をたくましくされているが、本稿では、「春眠」に着目して、考察を試みてみたい。

一 唐詩に見られる「春眠」

「春眠」の語は、唐より前の詩文には見つけられない。今、唐代の詩文に見えるものを列挙すれば、次の通りで

ある。

○王勃（六五〇—六七六？）³「春思賦」（『全唐文』卷一七七）

咸亨二年（六七一）、巴蜀に旅寓している時、様々な「春思」を書き連ねた賦で、帰らぬ夫を待つ婦人を詠う箇所に、

狂夫去去無窮已 狂夫去り去ること窮まり已む

無く

賤妾春眠春未起 賤妾 春眠 春未だ起きず

とある。そもそも、「春思」という語は、曹植「閨情」詩（『玉台新詠』卷二は、「雜詩」五首其四「攬衣出中閨」に作る）に、「春思安可忘、憂戚與我并」（春思安んぞ忘る可けん、憂戚 我と并はす）に見える。その後、鮑照「採菱歌七首」其三に「愁心不可盪、春思亂如麻」（愁心 盪かす可からず、春思 乱れて麻の如し）と詠まれ、謝朓・王僧孺・蕭子雲は「春思詩」を作っている。それらには、だいたい女性の思いが詠われている。これは、『淮南子』繆称訓の「春女思、秋士悲、而知物化矣。」（春女は思ひ、秋士は悲しみて、物化を知る。）や、『毛詩』豳風・七月「女心傷悲」の毛伝に「春女悲、秋士悲、感其物化也。」（春女悲しみ、秋士悲しむは、其の物化に感ずるなり。）、鄭玄箋に「春女感陽氣而思男、秋士感陰氣而思女。是其物化所以悲也。」（春女は陽氣に感

じて男を思ひ、秋士は陰氣に感じて女を思ふ。是れ其の物化の悲しむ所以なり。）とあるのを継承したものである。

○孟浩然（六八九—七四〇）「春曉」（『全唐詩』卷一六〇）

宋蜀本は「春晚絶句」に、明嘉靖十九年朱警輯『唐百家詩』は「春晚」に作る。

○王維（七〇一—？七六一）「扶南曲歌詞五首」其一（『全唐詩』卷一二五）

翠羽流蘇帳 とばり 翠羽 流蘇の帳

春眠曙不開 春眠 曙 開かず

羞從面色起 羞は面色より起り

嬌逐語聲來 嬌は語聲を逐ひて來たる

早向昭陽殿 早に昭陽殿に向かふ

君王中使催 うなが 君王の中使催せばなり

宮女の様子を詠った詩で、春の朝、眠りを楽しんでいた宮女たちが羞じらう顔でようやく起き、なまめかしい顔色や声とともに、使者に促されて天子のもとへと急ぐと詠う。

○李暇（生卒年里不詳。天宝以前人。）「怨詩三首」其一（『全唐詩』卷二〇、七七三）

羅敷初總髻 羅敷 初めて総髻し

蕙芳正嬌小
月落始歸船
春眠恆著曉

蕙芳正に嬌小
月落ちて始めて船に帰る
春眠 恒に曉に著く

古樂府「陌上桑」の秦羅敷を美女の名として使い、曉
になつて眠りにつく美女の様子を詠う。

○顧況（七二七？—八一六？）「桃花曲」（『全唐詩』卷
二六、二六七）

魏帝宮人舞鳳樓
隋家天子泛龍舟
君王夜醉春眠晏
不覺桃花逐水流

魏帝の宮人 鳳樓に舞ひ
隋家の天子 龍舟に泛ぶ
君王 夜酔ひて春眠晏し
覺えず桃花の水を逐ひて流る

魏武帝曹操の銅雀台、隋の煬帝の故事を使い、君王が
夜の宴会のため、朝起きるのが遅くなり、桃の花が流れ
ていくのに気づかないという。君王は玄宗を指すとする
説もある。結句は、孟浩然の「春曉」とよく似た発想で
ある。

○李彦遠（生卒年里不詳。一作李彦暉、李彦暉。大曆至
貞元間人。）「采桑」（『全唐詩』卷一九、三一一）

采桑畏日高 采桑 日の高きを畏れ
不待春眠足 春眠の足るを待たず

攀條有餘愁
那矜貌如玉
千金豈不贈
五馬空踟躕
何以變真性
幽篁雪中綠

えだ 条を攀じるに余愁有り
なん 那ぞ矜る 貌 玉の如きを
千金 豈に贈らざらん
五馬 空しく踟躕す
何を以て真性を変へん
幽篁 雪中の緑

古樂府「陌上桑」の秦羅敷が府君の誘いを拒否したこ
とを詠ったもの。卷三一一「采」作「採」、「愁」作「態」。
「矜」、卷三一一校記云、一作「憐」。
○令狐楚（七六六—八三七）「長相思二首」其二（『全
唐詩』卷二五）、「閨人贈遠（一作長相思）」（『全唐詩』
卷三三四）

綺席春眠覺
紗窗曉望迷
朦朧殘夢裏
猶自在遼西

綺席 春眠より覺め
紗窗 曉望迷ふ
朦朧 たり殘夢の裏
猶ほ自ら遼西に在るがごとし

夢に遠くにいる人を見て、醒めた後も夢の続きのよう
にその人のもとに在るようだという。空閨を守る女性を
詠う閨怨詩である。「綺席」、卷三三四校記云、一作幾
度。

○白居易（七七二—八四六）「春眠」（『全唐詩』卷四二
九）*0233元和六年（八一）作

新浴肢體暢
獨寢神魂安

況因夜深坐

遂成日高眠

春被薄亦暖

朝窗深更閒

卻忘人閒事

似得枕上仙

.....

新たに浴して肢體暢のびび

独り寝ねて神魂安し

況んや夜深きまで坐するに因りて

遂に日高きまで眠るを成すをや

春被薄きも亦暖に

朝窓深くして更に閑なり

却つて人間の事を忘れ

枕上の仙を得るに似たり

○白居易「新昌新居、書事四十韻、因寄元郎中張博士」
（『全唐詩』卷四四二） * 1353長慶元年（八二一）作

冒寵已三遷

歸期始二年

囊中貯餘俸

園外買閒田

.....

假歸思晚沐

朝去戀春眠

拙薄才無取

疏慵職不專

.....

屏除俗事盡

寵を冒かうむりて已に三遷し

期に歸りて始めて二年

囊中に余俸を貯へ

園外に閑田を買ふ

仮いとまに歸りて晚沐を思ひ

朝より去りて春眠を恋ふ

拙薄にして才取る無く

疏慵にして職専らならず

屏除して俗事尽き

養活道情全
尚有妻孥累
猶爲組綬纏

.....

蠻榼來方瀉

蒙茶到始煎

無辭數相見

鬢髮各蒼然

養活して道情全し
尚ほ妻孥の累おもひ有り
猶ほ組綬の纏まとひを爲す

蠻榼來たりて方に瀉まさぎ

蒙茶到りて始めて煎そよず

辞する無かれ数しば相見るを

鬢おの髮各おの蒼然たり

○白居易「春眠」（『全唐詩』卷四六〇） * 366開成五年（八四〇）〜会昌五年（八四五）作

枕低被暖身安穩

日照房門帳未開

還有少年春氣味

時時暫到夢中來

枕低く被暖かにして身安穩な

り

日は房門を照らして帳未だ開

日は房門を照らして帳未だ開

還有少年春の氣味有り

時時暫く到りて夢中に來た

る

「春眠」と題する詩、二首ともに日が高くなるまで寝る閑居の安楽な様を詠う。「新昌新居」の詩も同様である。そもそも白居易にとって睡眠は、自身の閑適の生活を充足させる重要な要素の一つであった。これについては、埋田重夫氏の『白居易研究―閑適の思想』第五章「白

居易と睡眠―「閑」と「適」を充足させるもの（汲古書院、二〇〇六年）に、詳細に論じられている。「春眠」の詩語もその中で使用されているのである。

○元稹（七七九―八三二）「和樂天重題別東樓」（『全唐詩』卷四一七）

山容水態使君知

樓上從容萬狀移

……

牋鋪牀席春眠處

乍捲簾帷月上時

光景無因將得去

爲郎抄在和郎詩

山容水態使君知る

樓上從容として万状移る

牋^{あま}し鋪^しく牀席 春眠の処

乍^{たちま}ち捲く簾帷 月上るの時

光景 將^もち得て去るに因^{よし}無し

郎の為に抄在せんとし郎の詩

に和す

長慶四年（八二四）に白居易が東樓（杭州の望潮樓）

を去るのを惜しんだ詩に和した作。⁶この「春眠」は、白

居易の好む寢床から風景を楽しむ様をそのまま使ったものである

○溫庭筠（八一二？―八七〇？）「春愁曲」（『全唐詩』五七六）

紅絲穿露珠簾冷

に 紅糸 露を穿ちて珠簾冷^{ひや}やか

百尺啞啞下纖綆

百尺 啞啞として纖綆を下す

……

涼簪墜髮春眠重

玉兔燼香柳如夢

……

涼簪 髪より墜ち春眠重く

玉兔の燼香 柳夢の如し

宮怨詩で、「春眠重し」は、宮女が深い眠りにについていることをいう。

○溫庭筠「感舊陳情五十韻獻淮南李僕射」（『全唐詩』卷五八〇）

……

懶多成宿疚

愁甚似春眠

木直終難怨

膏明只自煎

懶多く宿疚を成し

愁甚しく春眠に似る

木直なれば終に怨み難く

膏明なれば只だ自ら煎す

……

この「春眠」は、韋忠物の「寄李儋元錫」詩に「世事茫茫難自料、春愁黯黯獨成眠」（世事 茫茫として自ら料り難く、春愁 黯黯として独り眠りを成す）というような憂愁の情を含むもので、この一例しか見当たらない。

○魚玄機（八四四？―八六八）「江行」（『全唐詩』卷八〇四）

大江橫抱武昌斜

大江 横に武昌を抱きて斜なり

鸚鵡洲前戸萬家

鸚鵡洲前戸 萬家

畫舸春眠朝未足

画舸の春眠 朝未だ足らず

夢爲蝴蝶也尋花

夢に蝴蝶と為りて也花を尋ぬ

船旅を続け、春の朝、まだ眠り足りないという。「春

眠」は作者自身の眠りである。辛島驍氏は、三、四句に

ついて、「わたくしは、この二句には、裏に意味がかく

されていると思う。思いきって言えば、李億と魚玄機と

の間には、朝の性交が行われた。それを作者は、いとも

美しく表現したまでだといったのである。中国文学で

性交を象徴的に描く場合、蝶が男性のシンボルであり、

花薬が女性のシンボルであるのが常識である。：（中

略）：しかるにこの詩では、作者である女性の魚玄機が、

夢に蝶となつて、また花をたずねたと表現されている。

これはあえて莊周が夢に蝶となつた故事をつかつたか

ら、そのような表現をとり、いかにも船が漢江をくだつ

てくる道々、花を賞しつづけてきた春の旅のおもむきを、

表白しようとしたことになるが、しいていえば、魚玄機

の李億よりも激しい積極的な性慾の、倒錯的な無意識の

表現ともいえると思う。」（漢詩大系『魚玄機・薛濤』

集英社、一九六四年）という。もしそうならば、この「春

眠」は女性の眠りを詠う閨怨詩のものと同じことになる。

「朝未足」、校記云、一作「猶未穩」。

○鄭谷（八五一？—？）「寄左省韋起居（一作字）」（『全

唐詩』卷六七四）

風神何蘊藉

風神 何ぞ蘊藉たる

張緒正當年

張緒 正に当年なり

端簡爐香裏

簡を端す^{ただ}炉香の裏

濡毫洞案邊

毫を濡らす^{ただ}洞案の辺

飾裝無雨備

飾裝 雨に備ふる無く

著述減春眠

著述 春眠を減ず

旦夕應彌入

旦夕 応に^{いよ}弥いよ入るべし

銀臺曉候宣

銀台 曉に^ま宣を候つ

門下省での仕事を詠った詩で、仕事に精出せば「春眠」が減るとするのは、白居易の仕事を減らして「春眠」を増やすのとは逆だが、「春眠」自体の意味は白居易の詩と同じである。

これらを見れば、白居易によって「春眠」の詩語が閑適の象徴にされたのが一目瞭然である。それまでの詩の「春眠」は、女性を詠う艶詩の中で使われ、眠っているのは顧況の詩が君王であるのを除きすべて女性であった。ぼかぼか陽氣の春の朝、宮仕えのない心地よい眠りという従来の「春曉」詩の「春眠 曉を覚えず」のイメージは、白居易の詠む眠りの楽しみからもたらされたのではないだろうか。白居易の **cosc* 「春眠」に「況んや夜深きまで坐するに因りて、遂に日高きまで眠るを成すをや、春被薄きも亦暖に、朝窓深くして更に閑なり、却つて人間の事を忘れ、枕上の仙を得るに似たり」と詠

われ、また「曉寢」*1066元和十三（八一八）作に、

轉枕重安寢
枕を転じて重ねて安寢し
回頭一欠伸
頭を回して一たび欠伸す
紙窗明覺曉
紙窓明らかにして曉を覚え
布被暖知春
布被暖かにして春を知る
莫強疏慵性
疏慵の性に強はるは莫く
須安老大身
須く老大の身を安んずべし
鷄鳴猶獨睡
鷄鳴くも猶ほ独り睡る
不博早朝人
早朝人に博へず

曉に眠っていられる気楽さはとても早朝に出仕する身に換えられないと詠われているのを見ると、そう思わざるを得ない。

二 孟浩然的閨怨詩

王勃の「春思賦」で述べた「春思」の外にも、「春意」「春情」「春怨」「春恨」「春心」「春閨」「春詞」など、「春」を冠した閨怨詩がある。孟浩然にもそれに類する数首の詩があり、『孟浩然詩集箋注』（佟培基箋注、上海古籍出版社、二〇〇〇年）によると、以下の詩が抽出できる。

○「美人分香」

艷色本傾城

艷色 本城を傾け

分香更有情
分香 更に情有り
髻鬟垂欲解
髻鬟 垂れて解けんと欲し
眉黛拂能輕
眉黛 払ひて能く輕し
舞學平陽態
舞は平陽の態を學び
歌翻子夜聲
歌は子夜の声を翻す
春風狹斜道
春風 狹斜の道
含笑待逢迎
笑みを含みて逢迎を待つ

○「美人分香」は、陸機「弔魏武帝文」（『文選』卷六）の魏武帝曹操の遺令に、「余香は分かちて諸夫人に与へよ」とあるのによつたもの。宮女、歌妓の迎えを待つ様を詠う。

○「春意」

佳人能畫眉	佳人 能く眉を画き
粧罷出簾帷	粧罷みて簾帷より出づ
照水空自愛	水に照らして空しく自ら愛し
折花將遺誰	花を折りて將に誰にか遺らんとす
春情多艷逸	春情 艷逸多く
春意倍相思	春意 倍ます相思ふ
愁心極楊柳	愁心 楊柳に極り
一動亂如絲	一たび動けば乱ること糸の如し

「春意」は「春怨」に作るテキストもある。いずれにしても男性を思う女性を描く閨怨詩である。詩中の「春

意「春情」ともに女性の思いをいう。

○「賦得盈盈樓上女」

夫婿久別離 夫婿久しく別離し
青樓空望歸 青樓 空しく帰るを望む
粧成卷簾坐 粧成り簾を巻きて坐し
愁思懶縫衣 愁思 懶くし衣を縫ふ
燕子家家入 燕子 家家に入り
楊花處處飛 楊花 处处に飛ぶ
空床難獨守 空床 独り守り難し
誰爲報金徽 誰の為に金徽を報ぜん

「古詩十九首」其二「青青たり河畔の草」の「盈盈たる樓上の女、皎皎として牕牖に当たたる」をもとに、帰らぬ夫を待ちながら空閨を守る女性を詠う。

○「閨情」

一別隔炎涼 一たび別れ炎涼を隔て
君衣忘短長 君衣 短長を忘る
裁縫無處等 裁縫 処として等しきは無く
以意付情量 意を以て情量を付る
畏瘦疑傷窄 瘦を畏れて傷だ窄きかと疑ひ
防寒更厚裝 寒を防ぐに更に厚く装せん
半啼封裏了 半ば啼きて封裏し了はり
知欲寄誰將 誰に寄せて将らさんと欲するかを

知らん

夫人が征夫を思いつつ送り届ける衣服を作るという閨怨詩。出かけてから一年が過ぎ、夫の体型に衣服が合うかどうかを案じるのは、謝惠連「擣衣」(『文選』卷三〇)に「腰帶は疇昔に准ず、今の是非を知らず」などであるのを踏襲する。

○「寒夜」

閨夕綺窗閉 閨夕 綺窓閉じ
佳人罷縫衣 佳人 衣を縫ふを罷む
理琴開寶匣 琴を理めんとして宝匣を開くも
就枕臥重幃 枕に就きて重幃に臥す
夜久燈花落 夜久しくて灯火落ち
薰籠香氣微 薰籠 香氣微かなり
錦衾重自暖 錦衾 重ねて自ら暖かく
遮莫曉霜飛 遮莫 曉霜飛ぶ

詩題は「寒夜」だが、閨で夜を過ごす女性の様子を描写している、これも閨怨詩と見なしてよいだろう。

○「春情」

青樓曉色珠簾映 青樓 曉色 珠簾に映え
紅粉春妝寶鏡催 紅粉 春妝 宝鏡に催す
已厭交情憐枕席 已に厭く交情し枕席を憐むに
相將游戲繞池臺 相将つれて游戲し池台を繞る

坐時衣帶繁纖草
行即裙裾掃落梅
更道明朝不當作

相期共鬥管弦來

坐する時 衣帶 纖草を繁まひ
行けば即ち裙裾 落梅を掃なふ
更なごも道ふ明朝は当に作すべ
からずと

相期す共に管弦をたたか門はさんと

これは通常の閨怨詩とは趣を異にし、枕席に侍ることに厭き、散策して草や落梅を嫌い、楽器の演奏を競い合おうという。しかし、「春情」と題して、女性の様子を詠っていることに変わりはない。

隠者のイメージが強い孟浩然に閨怨詩があるといつても、それほど驚くことではない。石川忠久氏が「まあ、孟浩然って人はね、隠者っぽいイメージで語られていまして、中身を見ると、葛藤もあり、悩みもあり、そういう人間臭い詩もつくっているんです。」「王維先生もね、とりすましたような顔をしてるけど、悠々自適な生活を描いた詩ばかり詠んでたわけじゃない。秋の月夜に琴をつまびきながら、男を待ちこがれている女の身の上を詠った、「秋夜曲」なんていう詩もあるんです。」と語られているとおりである。男性の詩人が女性の視点で愛情を描写するということは、中国古典詩の一つとして定着していて、そして男性が女性の立場から愛情を詠うという特異な手法は、恋愛詩の主流として確立されているからである。唐詩においても例外ではなく、松浦友久氏の『中国詩歌原論』「唐詩に表れた女性像と女性

観——「閨怨詩」の意味するもの——（大修館書店、一九八六年）に詳細に論じられている。

「春曉」詩が先に挙げた孟浩然の一連の閨怨詩の中に含まれていたとしても、それほど驚くことではないと言える。

三 「春曉」

「春曉」の語は、隋以前の詩文では、梁・沈約「詠梧桐詩」（『芸文類聚』卷八八引）に「秋還遽已落、春曉猶未黃」（秋還遽に已に落ち、春曉猶ほ未だ黄めばえず）と見えるのみであるが、唐詩では、孟浩然の「春曉」以降、詩題や詩語に散見する。中に「春曉」と題する詩が四首ある。その内、陸龜蒙（？—八八—）と李中（生卒年不詳、南唐→宋）の二首は、春の曉の情景を詠ったもので、孟浩然の詩や閨怨詩との関連は見いだせない。以下、残り二首について、検討する。

○元稹「春曉」（元和十四年作、『全唐詩』卷四二二）

半欲天明半未明

半ば天明けんと欲し半ば未だ

醉聞花氣睡聞鶯

酔ひて花氣を聞き睡りて鶯を

聞く

狂兒撼起鐘聲動

狂兒 撼起し鐘声動く

二十年前曉寺情

二十年前 曉寺の情

に似たり

元稹が自身の体験をもとに記したと言われる伝奇小説「鶯鶯伝」での、崔鶯鶯との恋情を懐古した作品で、「春曉」と題して、艶情を詠っている。「鶯鶯伝」では、普救寺に寓居していた張生のもとを訪ね、一夜を共に下した鶯鶯が夜明けに侍女の紅娘に促されて去って行く場面を、「有頃、寺鐘鳴、天將曉。紅娘促去。崔氏嬌啼宛轉。紅娘又捧之而去。」（頃く有りて、寺鐘鳴り、天將に曉けんとす。紅娘去るを促す。崔氏嬌啼宛轉たり。紅娘又之を捧げて去る。）と記す。この詩は、その時のことを思い起こしたものである。「娃兒」は黄色の子犬で、閨で愛玩用に飼われていたという。とすれば、この詩は女性の鶯鶯の立場から詠んだとも考えられる。『元稹集』『才調集』、「娃」作「娃」。

○温庭筠の楽府「春曉曲」（『樂府詩集』卷一〇〇、『全唐詩』卷五七七、校記云、一作齊梁體。『全唐詩』卷八九一「木蘭花」、校記云、即春曉曲、集作古詩。

家臨長信往來道

家は臨む長信往來の道

乳燕雙雙拂烟草

乳燕 双双 烟草を払ふ

油壁車輕金犢肥

油壁の車輕く金犢肥え

流蘇帳曉春雞早

流蘇の帳曉け春雞早し

籠中嬌鳥暖猶睡

籠中の嬌鳥 暖くして猶ほ睡り

簾外落花閑不掃

簾外の落花 閑にして掃かず

衰桃一樹近前池

衰桃の一樹 前池に近く

似惜紅顏鏡中老

紅顏の鏡中に老いるを惜しむ

劉学鐸の『温庭筠全集校注』（中華書局、二〇〇七年）に、「長信」は漢の長樂宮の宮殿の名で、漢の成帝が趙飛燕を寵愛したため、班婕妤が長信宮に入り太后に仕えたことを挙げる。また唐の宮怨詩は「長信宮詞」と題して作られることが多いと指摘し、この詩の「内容も宮怨と関係ある」という。華麗な車で外出すること、宮中で老いていくことを対比した内容は、宮怨詩と考えられる。南唐の後主李煜（九三七—九七八）にも、同題の詩（『全唐詩』卷八八九「木蘭花」、校記云、一名玉樓春、一名春曉曲、一名惜春容。）がある。

元稹と温庭筠の二首を見れば、「春曉」と題する詩には、ただ春の曉の情景を詠ずるものの外に、閨怨詩の流れをくむものが存在していたことがわかる。

おわりに

以上、唐詩における「春眠」の詩語の使われ方、孟浩然の閨怨詩、「春曉」の詩題について検討した結果、孟浩然の「春曉」詩がただ惜春の情を詠んだものではなく、もともと夜更かしをした後の女性の様子を詠った閨怨詩であった可能性はかなり高いことがわかった。唐代において小説以外では、男性の詩人が直接に女性への恋情を詠むことはまれであり、莊魯迅氏の創作のように、孟浩然が小真娘に「春曉」詩を自身の思いとして贈ったとい

うことは考えにくい。それよりも、女性の思いを閨怨詩として詠んだとするのが妥当であろう。ただ、孟浩然がどういう意図で詠んだのかについては不明で、「春眠」の詩語から、閨怨詩であった可能性も否定できないと言えるだけである。もし、閑適の意を込めて「春眠」の語を使ったのなら、白居易詩の先蹤作となるが、それも断定はできない。「春眠」の使用例を見ると、むしろ白居易詩の影響を受けて、隠者孟浩然のイメージと重ね合わさって、今に伝わる「春曉」の意味に確定されたと思われる。

注

(1) 徐鵬校注『孟浩然集校注』附録「作品繫年」(人民文学出版社、一九八九年)による。

(2) 「青燈詩話」連載対談「第二回 春の詩(下)、石川忠久、中西進」(月刊『うた』Vol. 14 No. 5、1100三年五月)でも、

中西 日本で言いますと、「三千世界のカラスを殺し、ぬしと朝寝がしてみたい」。これは高杉晋作が好んだ端唄はうたです。すけどね。「朝寝」っていったら、もうそうなんです。ですからこの「春曉」も、日本的に詠むとすると、艶情詩、つまり男女の恋の寓意を読むとすることができなくもないんです。

石川 なるほど。

中西 「春眠 曉を覚えず、処処啼鳥を聞く」。これは、日本でいうと、女性の部屋で朝を迎えて、起きて帰らなきゃいけない、となる。「夜来 風雨の声」、そして「花落つること」……。

石川 実はそういった解釈もないことはなくて、最近、莊魯迅という中国の人が、この詩は蘇州の妓女に贈られた恋の詩だ、なんて言っているんです。でも、この解釈は今のところ、あまり支持を得ていないように思いますね。

と言及されている。

(3) 生没年は、周祖譔主編『中国文学大辞典』唐五代卷(中華書局、一九九二年)による。以下同じ。

(4) 王啓興・張虹注『顧況詩注』(上海古籍出版社、一九九四年)に、「君王」は唐玄宗を指し、詠史の作だとする。

(5) 詩番号、制作年は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、一九七四年)の「総合索引表」による。

(6) 制作年は、花房英樹『元稹研究』(彙文堂書店、一九七七年)の作品総合表による。

(7) 前掲注(2)。

(8) 元和二年(八〇七)に宰相となった武元衡(七五八—八一五)の「春曉聞鶯」詩と、李益・王建・許孟容・楊巨源らがそれに和した詩の計五首を除く。

(9) 陸龜蒙の詩は「春庭曉景別、清露花遡迥。黃蜂一過慵、夜夜棲香蕊。」(『全唐詩』卷六二七)、李中の詩は「殘燭猶存月尚明、幾家幃幌夢魂驚。星河漸沒行人動、歷歷林梢百

舌聲。」(『全唐詩』卷七四七)である。